

校長室

だより



R7.7.8 Vol.15

職員朝礼

職員朝礼で養護教諭が「今日は熱中症の暑さ指数が〇〇です。クールネックリングの活用や水分補給、きちんとお願いします。」担任も、もちろん気をつけていますが、やはり担任は、日々の学習指導や生活指導へ意識がいきがちです。そんな中、ありがたい一言です。

気分が悪くなったり、けがをしたりして保健室に来る子供にも、「痛かったね。」とか「しんどいね。」と声をかけている姿。きっと子供は安心していることでしょう。「そのくらい大丈夫！」私はついそう言うてしまうのですが、共感してもらえる嬉しさは大人も子供も同じですね。

子供の心身の健康の保持増進の視点から関わりを持っていただく養護の先生も学校になくてはならない存在です。



半年が過ぎました…

私が新採時に担任した教え子が亡くなって半年が過ぎました。料理人でもあった教え子。線香を上げに行ったとき、教え子が残していたレシピノートを奥さんに見せていただきました。『魚の煮付け』『え、こんなひと手間でいいの？俺にもできそう…。』以来、煮付けがとっても美味しくなりました。

「いつまでも心の中で生きています。」ドラマとかで聞くセリフ。若い頃は『死んだ人は死んだんだ』とこの言葉に嘘くささしか感じていませんでした。

ふとした瞬間に脳裏をよぎる教え子の笑顔。「まさっちゃん！飲み行こや！」今もそんな連絡が入ってくる気がします。『心の中で生きている』とみに実感する今日この頃です。

自然の恵みと教え子に感謝&献杯！



四方山話真穴 ver2. 其の十五(特性)

水泳部の練習も熱を帯びてきました。昔話を少々。私は小学生の頃、平泳ぎができませんでした。キック(いわゆるカエル足)がどうしてもあおり足になってしまうのです。できる子はすぐできているのに…。大人になり、この仕事に就いて、水泳を教える時間も当然でできます。すると子供の頃、どうしてもできなかったキックがそれなりにできるのです。不思議で仕方がなかったのですが、運動神経回路のつながりが原因だったようです。小学生の頃の私の脳は平泳ぎに関しては、イメージした動きを体現できる段階まで発達してなかったわけです。その神経回路がいつつながっていくのか、それは人によって、千差万別です。回路がつながっていない段階で無理やり教え込んでもそれは子供にとって苦痛なだけです。水泳そのものに苦手意識を持ち始めます。私の指導法ではありますが、そういう段階の子供には無理にカエル足を教えるのではなく、ドルフィンキックでの平泳ぎを教えます。平泳ぎとバタフライは体の使い方が似ていますので、とりあえず体の使い方を教えておくわけです。(もちろん指導法も千差万別です。)

水泳に限った話ではなく、子供は同じ年齢でも、それぞれの特性を持っていますし、特に小学校段階はその特性の違いが現れてくる段階でもあります。特性を得手不得手と言い換えてみましょう。不得手を克服していくという考え方ももちろんありですし、そこで成長を感じる子供もいます。でも今の段階ではどうしても無理な場合もあります。ならば得手をさらに伸ばすという発想の転換はどうでしょう。得手を伸ばす中で、不得手を克服する何かを掴むことがあるかもしれません。少し回り道をしながら共に学んでいく。それくらいのスタンスの方が、大人も子供も精神的にもお互いの関係においてもちょうどいいのかもしれないですね。(私の子育ての反省です…。)

----- 切り取り線 -----

便りの感想や学校への要望等ありましたら、お聞かせください。今後の学校経営・運営に役立てていきたいと思います。